

# 小説

小松文芸賞・森山啓文学賞候補作

## 南洋桜

岩上町 山口 俊一郎

令和元年五月、九十五歳になつた大岩美雪は、例のごとく金石の老人ホームの屋上から、冬の寒気が抜け切つた加賀平野を眺めている。美雪がいつも見ているのは、金沢と白山の間である。

美雪は山の向うが名古屋と浜名湖の中間辺りで、さらにその先の太平洋上には常夏の島々があり、そしてオーストラリアに行き着くと勝手に想像している。そして、自分が生まれた白峰の山が、白山麓にひっそりと寄りそっている。

美雪は、これらの山々を眺めていて、飽きることがない。心の

中には、自分の一生が走馬灯のように浮かんで消えていく。

大正十四年の冬、白峰から手取川の支流滝ノ川沿いに約十キロ、谷間の道を行つた深谷にある森沢家に美雪は生まれた。家は貧しく、季節出作りといつて春になると山で寝泊まりし、焼畑、養蚕、炭焼き、そして薪を作り、山菜を採つて暮らしていた。

祖母と両親、それに美雪の上には男二人、女二人の四人の子どもがいた。美雪は五人兄弟の末っ子ということもあって、貧しい

ながらも皆に可愛がられて育った。

小学校へ入学した時の感激を、美雪は一生忘れることがなかった。

戸数三十戸の深谷で、貧しい家の五人兄弟の末っ子ということで、村の中でも家族の中でも、美雪を一人の人間としてみてくれる人は一人もいなかった。又、人々にはその余裕もなかった。美雪の内心の希望や興味は、他の人々にとって全く関心のないことであつた。

しかし学校は違つた。

特に一年生の担任石川律子先生は、二十二名の一年生全員を一人の人間として尊重し、各々の人生を少しでも向上させてやろう、という気概に満ちていた。金沢出身の石川先生は、隣り村の地主の離れに下宿していた。深谷からは二キロ程の道のりであつたが、美雪は先生の下宿へ遊びに行くことが大好きだつた。

日曜日、先生に呼ばれて友人と先生の下宿へ歩いて行く時の楽しさは、今でも美雪の心にきらめいている。

先生の部屋は、何かいい香りがした。美雪には生まれて初めての二才子であつた。

先生がくれる金沢のお菓子も美味しかった。そして、美雪の心を揺さぶるのは、その包み紙であつた。その色、その模様、その手触り。深谷の大自然の中には無いものであつた。美雪は家に戻つて帰り、いつも眺めていた。

先生の本棚の本も、美雪には輝いて見えた。世の中にはこんなものもあり、それを読んでいる人もいるんやと。

そして先生に接しているうちに、美雪は子供心に、人間は皆平等であると漠然と思うようになり、かえつて深谷の人々が好きになつていった。

石川先生は、美雪の一、二年生の担任であつたが、わずか二年で金沢の学校へ移つていった。しかし、美雪の長い人生に大きな影響を与えた人だつた。

小学校五年の夏休みには、祖母のマサが七十歳で亡くなつた。亡くなる前日まで畑仕事をしていて、手足が土で黒かつたことと、その日の夕方のひぐらしの声を美雪は今でも覚えている。

小学校六年生の秋、三泊の修学旅行で金沢へ行つた。美雪は末っ子ということでもあり、苦しい家計の中から修学旅行に行かせてもらえた。金沢では、兼六園、美術館、県庁その他を見学し、映画も見、路面電車にも乗つた。

又、生まれて初めて、デパートの食堂でアイスクリームを食べる旅館ではハムも食べた。ハムの二才子は、囲炉裏の上で燻した岩魚に似ていると思つた。

最後の夜、石川先生が旅館まで訪ねて来てくれた。先生は石川ではなく、名前も名山と変わつていた。そして新豎町小学校にいるとのことだつた。

「美雪ちゃん、大きくなつたねー。もう六年生やもんね。深谷はどうや。私も、初めて教師になつた深谷小学校のことは忘れられんわ。あの時が一番楽しかつた。ところで美雪ちゃん、小学校を卒業したらどうするんや。上の学校行くんか」

「はつきりとは決まっていますませんが、兄弟も多いしお金もないので、働くことになりました。もう少し大きくなつたら、金沢にいる叔父さんが、紡績工場か女中の働き先を探してくれることになっています」

「そうか。それならいつそ看護婦の道へ進んではどうや。あんたは、なんとなく看護婦に向いているように思うし、このまま勉強を止めるのは勿体ない気がする。これからは、女性も一生働ける

何か資格を持ち、自分自身の力で人生を切り開いていくべきだと思う。どうや。金沢の石引という所に、最近出来た看護婦養成の学校がある。行ってみんか」

美雪は先生の話聞きながら、深谷の人々の暮らしを思っていた。又、小学校時代、先生から折に触れ褒められたことも自信となっていた。美雪は子供心にも、資格を持ち自分の力で独立して生きていきたい、と何となく思っていた。

「しかもその学校というのは、全寮制といって学校に泊まり込み、お金はいらないよ。その代わり卒業したら、何年間かは決められた病院で働くことになるんやが。勿論働けばお金は貰えるんよ。どうや、美雪ちゃん、行ってみんか。家へ帰って、お父さんお母さんと相談してみて。もし行くことになったら先生へ手紙下さいね」と言つて名山先生は紙切れに住所を書いて渡してくれた。先生と他の同級生達は、車座になって旅館の大広間の片隅でいつまでも話し合っていた。

美雪の両親も先生と同じ考えだった。自分達の人生に比べ、美雪には一生働ける看護婦の道へ向かわせてやるべきだと思つた。美雪は生まれて初めて手紙を書き、いつも回って来る郵便屋さんに渡した。

一週間程して名山先生から手紙が届いた。

懐かしい先生の字、そしてあのいいニオイがした。美雪は今でもその手紙を大切に持っている。

翌日、担任の先生に職員室へ呼ばれた。

「森沢さん、名山先生から君のことで手紙をもらつたよ。君ももらつたと思うが、君の進路のことが書いてあつた。私も君が看護婦になることには大賛成や。君が小学校で勉強を終えるのは勿体ない。さすがに一年生の担任は、生徒のことをよく見てるわ。」

ガンバッテくれ。看護婦の道は厳しいが、君ならやっていけるはずや」と言つて、白峰出身の杉原剛先生は美雪の肩をたたいた。

昭和十一年三月、二十二名の同級生は残雪に埋まった校舎を後にした。美雪にとつては、兄弟同然の仲間との別れだった。

四月、美雪は石引にある看護学校へ入学した。

二クラス六十名、美雪は二組であつた。高等小学校を出ていない美雪達は、勉強は全教科を基礎から教えられた。四年間で全てのことをつめ込み、その後二年間の病院研修を経て、国家試験をパスし、ようやく一人前の看護婦になるという長く厳しい道のりであつた。

座学と並行して実習もあつた。

注射や解剖は、まだ幼い少女達には、シヨックの大きなものであつた。

初めてのカエルの解剖の時、皆で石引近くの田んぼからカエルを捕まえてきた。しかし、その日の夕食を食へられない子もいた。

注射の時も、手が震えてどうしても針が刺せない生徒に対し、先生がその生徒の手をつかんで針を押し込んで指導した。

人体解剖の時、美雪はなぜか深谷にある石の地藏さんを思い出した。

しかし、看護学校の生活では、忙しい合間を縫っているような経験をさせてもらえなし、楽しいことも多かつた。寮で相部屋の四人とはすぐに仲良くなった。一人は能登出身であり、実家から送ってくる差し入れによって、美雪は生まれて初めて能登の干物や佃煮を食べた。又、二人から海の話聞くのも楽しかつた。もう一人は金沢の犀川上流の出身であり、美雪と故郷が似ていることもあり話が弾んだ。

カレーライス、ソーセージ、コロツケ、パンとバター、そしてソースの匂いも強烈だった。これらの他に美雪には、豆腐の入った小豆汁も懐かしい味がして好きだった。深谷の報恩講を思い出した。夕食後に聞くラジオは楽しかったし、新聞の小説も分らないところもあったが、楽しみの一つだった。風呂のきれいな石鹸も珍しかった。

初めて海で泳いだ時、深谷の滝ノ川での自己流の泳ぎが通用したのが嬉しかった。そして、海では体が浮きやすいことも初めて体感した。

新聞社、機械工場その他社会見学もさせてもらった。若い美雪には、それら全てが栄養となっていた。

昭和十五年四月、美雪は看護学校を卒業した。

級友達も手術や注射にも慣れ、遅しく、若さハチ切れる看護婦の卵となっていた。

美雪は金沢の第二陸軍病院へ配属となった。第一外科であった。昭和六年九月に中国東北部で起こった満州事変の影響は、金沢にも及んでいた。

日中戦争が泥沼化していき、美雪の働く病院も目を追って慌ただしくなっていた。中国大陸との往来も激しくなり、軍医や看護婦の異動も頻繁に行われるようになった。中国戦線の拡大により、人手不足となった病院で、一年目でまだ研修中の美雪も、目の回るような日々を過ごしていた。中国から送られてくる負傷兵の数も次第に増加し、現地の苦戦が目に見えるようであった。

ヨーロッパでも昭和十四年九月、ドイツのポーランド侵入により、第二次世界大戦が勃発していた。

昭和十六年六月、独ソ不可侵条約を破り、ドイツがソ連に侵攻、

病院の空気が目を追って険しいものとなっていた。

何かが始まる。美雪は、とてつもないものへ向かって、日本が突き進んでいることをはつきりと自覚した。

昭和十六年十二月八日、月曜日の朝早く、寮の廊下を慌ただしく走る人の足音。

「全員講堂に集合、全員講堂に集合」拡声器を手に何べんも走り回る男性の声。美雪は跳ね起きた。数日前からの病院幹部と出入りする軍人上層部の挙動に、只ならぬものを感じていた。

講堂への道を小走りで急ぐ人々の口から「戦争や」「アメリカと戦争や」と言う声上がる。

講堂正面の壇上には、この時を予測していたように幹部の人々がズラリと整列していた。

その顔は真つ直ぐ前を見、全員微動だにできなかった。驚くような素早さで、全員整列を終えた。私語一つ聞こえず、全員の目は正面に突き刺さっていた。石像の群れのような中から、院長がマイクの前へ進み、「皆さん、本日未明、日本はアメリカ、イギリスとの戦争に突入しました。太平洋の真珠湾において、アメリカ艦隊を攻撃し大勝利したとのことです。私達は、これまで同様、全力を尽くして日本軍を支え、この戦争に勝利しましょう。前線の兵士達は命を惜しまず、死に物狂いで戦っています。私達も命尽きるまでお国の為に尽くしましょう」

学究肌の院長にしては珍しい話しかたであったが、美雪は感激と緊張の余り、奥歯を強く噛み締めている自分に気付かなかった。

副院長の音頭で、美雪も腹の底からバンザイを叫んだ。

人々も口々に「ついにやってくれたか。よくここまで我慢した

もんや」「一億火の玉となればどんなことでも出来るぞ」顔は上  
気し、歩き方もきびきびとし、目は真っ直ぐ前を見ている。

患者達もベッドから上半身を起こし、美雪に握手を求める人も  
いた。

中には「手術を麻酔なしでやってくれ」と冗談半分に言っ  
て、流していた手術を意気揚々と受けた患者もいた、という噂も美雪  
の耳に入った。

美雪は浮き浮きした毎日を送っていた。大きな船が前進し、少  
しずつ速度を速め、その舳先に自分が立っているような気分であ  
った。

しかし、昭和十七年六月五日から七日にかけてのミッドウェー  
の敗戦を知っている人は、病院には誰もいなかった。

昭和十八年二月、今や正看となった美雪にも従軍看護婦として  
の召集令状がきた。行き先はサイパン島だった。国内はまだ戦勝  
気分であり、病院でも壮行会をしてくれた。又、石川県から派遣  
される二十名の看護婦が県庁へ集められ、知事と九師団副師団長  
から激励もされた。

三月一日、金沢駅から広島島の宇品港へ向かった。

出発の日、深谷からは父と上の兄、そして金沢にいる叔父が駅  
まで見送りに来てくれた。どの顔も日本の勝利を信じ切っていた。  
母の作ったお守りを美雪はしっかりと握りしめ、汽車の窓か  
らいつまでも手を振り続けた。

二十名の看護婦と引率の若い兵士二名は、たちまち打ち解け  
た。遠くへ行くということから、同郷意識が団結を強くした。大  
阪で夜行に乗り換え、次の日の午後宇品港へ着いた。

宇品港は、ごった返していた。多くの輸送船と軍艦、行きかう

軍人、立ち上る埃。美雪達五名は慌ただしく他の人達と別れ、そ  
の日の夕方には早くもサイパン行きの輸送船、大山丸に乗り込ん  
だ。美雪にとっては、船に乗るということは初めての体験だった。  
とてつもなく大きな船に見えた。

五名は、全国から集まったサイパン行きの看護婦二十五名と合  
流し、引率は南洋庁サイパン支庁の南田さんと女性の星さんだっ  
た。夕食は、かすかに揺れ動く船の広間で、おにぎり二個と竹輪  
一本を皆言葉少なに食べた。

船には人と物が溢れていた。

夜七時、何の前触れもなく船が動き出した。

南田さんの説明によると、船は敵潜水艦の攻撃を避けるため、  
念のため陸に沿って横浜港まで行き、そこから七隻で船団を組  
み、順次、サイパン島、グアム島、トラック諸島、パラオ諸島へ  
と各々別れ、この船ともう一隻がサイパンへ向かい、約二週間で  
着くとのことであった。

さらに、日本を離れるにつれ、敵潜水艦や戦闘機による攻撃に  
あうこと、その時はかねて決められた通り、沈着に行動するよう  
強く言い渡された。美雪は改めて、自分の置かれた状況の厳しさ  
を思い知らされた。

充分なシャワーや洗濯も出来ない生活だったが、それにも次第  
に慣れていった。美雪は遅しくなっていく自分を感じた。

一週間で無事横浜港へ着いた。

そこで七隻の船団を組み、サイパン方面へ向かった。

外洋へ出ると、船酔いする者が続出したが、やがてそれにも慣  
れ、一路南下を続けた。周囲には戦艦の護衛が付き、正に堂々の  
輸送船団であった。

上空に日本の戦闘機が来ると、皆ちぎれるほどに手を振った。

夏服が支給された。次第に温度が上がり、美雪は故郷深谷の残雪を思い出していた。

途中、敵潜水艦の攻撃もあり、昼は島陰に停泊し夜航行することもあったが、約二週間後の昭和十八年三月下旬、無事サイパンに着いた。

サイパンにはまだ平穏な生活が残っていた。

とにかく暑い。太陽の光が輝いている、というよりも、青黒く不気味な感じさえした。

早速サイパン陸軍病院へ行く。建物は思ったより広く、高床式の木造平屋建てであった。外観の色は日本より派手で、ややけばけかしい感じがした。敷地は広く、ヤシ、バナナ、マンゴー、パイヤが日本の雑木のようにあちこちに自生していた。

病院の中は、相当数の負傷兵でかなり混み合っていた。各島々からの負傷兵が次第に増えていった。

美雪は外科に配属された。直属の上司は、金沢の穴水町出身の大岩宗武という軍医であった。

長身で眉が太く、色浅黒くガツツリした体格は医師というより山法師といった風であった。無口だが動きは的確であり、二十五歳にしては老けて見えた。現地のチャモロ人も多く働いていた。医師が二十名、他スタッフが二百名、合計二百二十名体制であった。

美雪は近くの寄宿舎で、輪島出身の海野という看護婦と同室であった。

まだ少し余裕のあった昭和十八年の前半、若い二人はサイパンを自転車で見回った。ガラパンの街へも遊びに行った。

のんびりしたチャモロ人の生活、初めの頃は現地の人かくれるマンゴーやパイヤが珍しく、食べ過ぎて腹痛に苦しんだことも

あった。

海野さんが熱帯魚をもらってきて刺身を作り、二人で食べてみたが日本の魚のようにコクがなく旨くなかった。

近くの集落の祭りに行き、無理に踊りの中へ誘われ踊った南洋の夜、海野さんと手をつないでの帰り道、宝石箱をひっくり返したような、手の届きそうな満天の星空、そして南十字星。海野さんと二人駆けずり回り、ようやく手に入れた乏しい材料で作った海苔巻き寿司を、職場の皆が一人一個ずつ涙を流して食べてくれたあの顔、顔。スコールの去った後のブルメリアの花の色とその香り。

又、美雪は看護婦として、日本人小学校の運動会に派遣されることもあった。

内地と同じ赤白の帽子、玉入れ、綱引き、百足競走、リレー、そして日本の民謡の踊り。昼休みには、物資の乏しい中、それでもやつの思いで作った弁当を囲む親子。それを遠巻きに見ているチャモロの人々。

しかし、昭和十八年の終わり頃には、情勢は一変してきた。もはや日本の劣勢は、覆うべくもなかった。制空・制海権は日本にはなかった。幸いにも、病院の屋根に取り付けてある大きな赤十字マークの為か、病院は無事であった。物資は日に日に乏しくなり、反面患者は急激に膨れ上がっていった。

美雪達の疲労は極限に達していた。もはや寄宿舎へ帰る余裕もなく、病院の片隅で眠ることも多くなってきた。

しかし、大岩軍医はあたかも仁王様のように突つ立ち、最小限の言葉で無駄のない指示を与え続けた。

美雪には今でも忘れられない患者が多くいる。

越中おわら節を、ゆっくり小さく口ずさみながら亡くなって

いった四十代の老兵。最後に一ぺん抱いて欲しいと言われ、美雪に抱かれ死んでいった沖繩出身の十七歳の少年兵。島内の排水工事が気がかりだと病院を抜け出し、艦載機の機銃掃射により亡くなった土木作業員。片足を失っても、日本へ帰ったら働いて結婚するんだと言って、懸命に歩行訓練をしていた山形出身の少年兵。

昭和十九年に入ると、正に絶望的な状況になってきた。医薬品の不足、患者の膨張。

医師やスタッフの中にも、疲労やデング熱で倒れる者も出始めた。もはや病院とて安心ではなく、地下へ避難する工事も必死で行われた。

アメリカ軍が上陸するのも時間の問題となった。

それでも皆は義務を投げ出すことはなく、文字通り命を懸けて働いた。

刻一刻と死が近付いているのが、皆にもわかっていった。それでも昭和十九年三月十日の陸軍記念日には、空襲の合間を縫って、簡単な式典があった。

その直後、美雪は大岩軍医に呼ばれた。初めてのことだった。南洋の太陽がギラギラと照り付ける中、ヤシの木の陰で大岩軍医が、「こんな時、突然こんな話をするのは無礼であり、自分の一方的な身勝手であることは百も承知している。しかし、もう後がない。身勝手なことを許してくれ。私は一人っ子だ。私が死んだら私の家はなくなる。それにも増して、私は君が好きだ。その訳は、言ってる暇がない。結婚してくれないか。私は死ぬ前に、好きな女性と一緒に生活してみたいんだ。そして、はつきり言う。自分の子供が欲しい」それだけ早口で言う、大岩軍医は美雪を睨みつけた。

「思いもよらないことで良くわかりません。しかし、大岩さんの心はよく分かりました。急ぎます。私でいいんですか。美人でもない山育ちの貧しい女です」

「いいんですね。スマン、びっくりさせて。何がおかしい、今笑つたろう」

「いいえ。男の人って、相当身勝手だということが分かりました。どうせもうすぐ死ぬ身ですから、何でも了解です。よろしくお願ひします」

「よし、戻ろう。二人一緒はまずい。先ず俺が先に帰るから、後から君が来ればいい」

大股でスタスタと去る大岩軍医の後姿を見つつ「人間死んだ気になれば何でも出来る」と言った祖母を思い出していた。

自分の身に起こった大事件、それもいきなり十分間足らずの間に。しかし、それを飲み込むような大きな危機が、次々と襲い掛かっていった。

その日の夕方、大岩軍医が、「皆、ちよつとだけ手を休めてくれ。私達は明日をもしれぬ命だ。死ぬ前に言っておく。私は、この森沢さんと結婚する。これも情報の一つだ。以上」啞然とする美雪に、皆の目が注がれた。ややあって、拍手が沸き上がった。久しく聞いたことのない拍手に、周囲の視線が集まった。

それでも、一応結婚式は院長の計らいで挙げてもらえた。彩帆神社にて、五月吉日、十人位の人が集まってくれた。

神主さん立会いの下、三々九度の最中、艦載機が襲来し素焼きの盃が機銃掃射により粉々に飛び散った。とっさに美雪をだきかかえた大岩軍医が、ヤシの木の陰に飛び込み辛うじて一命をとりとめた。

式後の帰り道、大岩軍医が「結婚指輪もないが、代わりに花を

やろう」と言つて道端の木から早咲きの花を取り、美雪の髪に刺してくれた。「これは、南洋桜という花だ。この木は別名を鳳凰木ともいうが、日本の合歓の木にそっくりで、花も同じ頃に咲く。大陸移動説の証拠かも知れんな」

「大陸移動説って何ですか」

「地球上の陸地は、絶えず動いているってことだ。もう一億年経つたら、サイパンと日本は陸続きになるかも知れんよ」

「そうなつたら、日本へ歩いて帰れますね」

二人の新居も、チャモロ人の男達が急遽造つてくれた。新居といつても防空壕のようなものであり、屋根はバナナの葉で葺いてある。

新婚生活も束の間、昭和十九年六月十五日、ついに米軍の上陸が始まつた。圧倒的な兵力の米軍により、島内は次々と占領されていった。

ついに病院周辺にも米軍が迫つてきた。

もはや病院といえども維持出来なくなり、ついに院長の命令により自主退避となつた。

病院撤収の騒然とした中、最後に夫の大岩軍医が、じつと美雪の目をみつめ「ありがとう、楽しかった」と言つて、汚れ破れた白衣のポケットから羊羹の一切れを美雪に渡し、病院の中へ戻つていった。その大きな背中が、年月と共に美雪の心により鮮明に浮かんできくる。

美雪は人々の流れに飲み込まれ、北へと流されていった。周りには砲弾が絶え間なく降り注ぎ、空はどんより曇つていた。

美雪の記憶にあるのはそこまでだつた。

「ナース」とか「オオイワ」と言う聞きなれない声にハツと意

識が戻つた。そこは、米軍のテントの中だつた。美雪は捕虜になつたのだ。

これまで鬼畜米英と教えられた美雪にとつて、昭和二十年九月に日本へ帰るまでの捕虜生活は、予想に反するものだつた。確かにアメリカ人には無神経なところはあつた。しかし明るく、やや一方通行的ではあつたが親切ではあつた。特に美雪は看護婦ということもあつて、日本人の世話を任される場面も多かつた。

又、その物資の豊かさには、驚きを通り越してあきれることもあつた。

昭和十九年の初秋、秋とはいつても真夏の天候ではあるが、美雪は自身の妊娠が分かつてから、ともかく生きて日本へ帰ろう、と強く決心した。

昭和二十年九月、約一年三か月の捕虜生活を終え、富士丸という船で日本へ歸つた。生後半年余の洋を抱いて甲板に立ち、去り行くサイパン島と、島で亡くなつた多くの人々へ別れを告げた。

金沢駅へ出迎えてくれた両親の顔と、母親の作つてくれた梅干し入りのオニギリの味は、今でも美雪の脳裏にしみ込んでいる。

早速穴水町の夫の実家を探した。小さな駄菓子屋だつた。妻に先立たれ、義父一人が店番をしていた。夫にそっくりの義父は、孫の洋を抱いて「よく息子の最後の願いを聞いてくれた。ありがとう。息子にもそんな日々があつたかと思うと、ワシも死んだバーサンも少しは心が休まるわ」と言つて泣いた。

母子寮へ入れてもらい、幸いにも金沢医専の附属病院に職を得ることが出来た。日本の穏やかな気候と、その緑の美しさに美雪は次第に自分を取り戻していった。洋を託児所に預け、美雪は懸命に働いた。

母親のタケが、農閑期には泊まり込みで美雪母子を支援してく

れた。夜勤もこなすことが出来た。

休日には、洋を連れて穴水町へよく行った。二階で夫の小さな勉強机を見た時、美雪はいつまでも涙が止まらなかった。

父と同じく医師になった洋は、今では病院の他に金沢とその近辺の四つの老人ホームを運営している。孫の尚彦も、同じく父の病院で働いている。

何もすることがなくなった美雪は、小立野の自宅近くにある洋の高級老人ホーム特別室で、大好きな人文地理の絵本を眺めて暮らしていた。

しかし、ある日こっそりと、美雪が金石にある老人ホームに移った理由は誰にも分からなかった。

今日も美雪は老人ホームの屋上で、車椅子に座り金沢と白山の間を眺めている。

美雪はどうしても、洋の高級老人ホームにいる自分を許せなかった。自分の人生が全て否定される気がした。

サイパンの病院で、砲弾の中、最後まで看護日誌を書いていた若い見習い看護婦。空腹を抱え、患者を背負って北へ向かって行った衛生兵の後姿。病院撤収を知りつつ周囲の排水路を整備してくれたチャモロ人の老人。最後まで組織を乱すことなく、懸命に義務を果たし、死んでいった名もなき多くの兵士達。そして夫との短い防空壕の中での新婚生活。チャモロ人の老婆が小川で捕ってくれたウナギをかば焼きにして、蝋燭の明かりで夫と二人で食べたあの夜、ウナギを手渡す時、老婆が「コレ、タベルト、ゲンキツクヨ」と笑ったあの笑顔。

それらが走馬灯のように、美雪の心に浮かんで消えていく。今日も美雪は、屋上でつぶやくような小声で歌っている。

さらばラバウルよ 又来るまでは  
しばしわかれの 涙がにじむ  
恋しなつかし あれ島見れば  
椰子の葉かげに 十字星

船は出てゆく 港の沖へ  
愛しあひの娘の うちふるハンカチ  
声をしので 心で泣いて  
両手合わせて ありがとう